

国際生命情報科学会(ISLIS) 創立 30 周年記念行事 ISLIS 主催 第 60 回生命情報科学シンポジウム

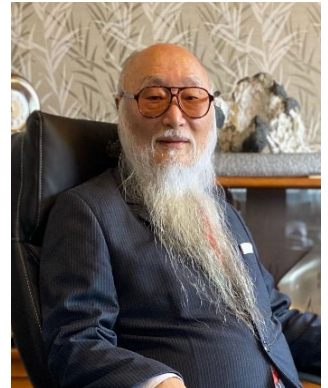
開催日: 2025 年 8 月 8-11 日(金-月) 大会長: 帯津 良一 ISLIS 前会長
開催地: 静岡県 伊豆高原「華水月」はなみずき 借切

<理事長講演>

人財と連携の結集を
- ホリスティック医学・不思議の科学の拠点,
国際生命情報科学会(ISLIS)・国際総合研究機構(愛理 IRI)・
世界一の「潜在能力科学研究所」・「いやしのビル」へ -

山本 幹男 博士(医学), 博士(工学)
(Mikio YAMAMOTO, Ph.D., Ph.D.)

国際生命情報科学会(ISLIS) 理事長・編集委員長,
科学平和文化財団(SPC-F) 理事長, 国際総合研究機構(愛理 IRI) 理事長,
「潜在能力科学研究所」創立責任者, 「いやしのビル」企画委員長 (日本, 千葉)



要旨: 2025 年は 当国際生命情報科学会(ISLIS)の創立 30 周年記念年である。その記念行事として、少なくとも、次の 2 回の「ホリスティック(全人的)医学と不思議の科学」を主テーマとする「生命情報科学シンポジウム」を ISLIS が主催する。第 59 回は河野貴美子現会長を大会長として ビジョンセンター東京日本橋にて 3 月 29-30 日(土-日)に盛大に有意義に開催された。

第 60 回は帯津良一前会長を大会長として、錦鯉が 40 匹も泳いでいる庭園付の大抵宅伊豆高原「華水月」はなみずきを借切って、第 17 回の合宿形式にて 2025 年 8 月 8-11 日(金-月)に開催する。企画・演題・参加者を募集中。これらに多くの方の講演・発表・セミナー・分科会・ミニシンポ・ワークショップ・実技指導披露等の応募と参加を望む。

ISLIS は、その兄弟組織でこの分野の幾多の研究成果を挙げてきた国際総合研究機構(NPO-IRI)/科学平和文化財団(SPC-F)・国際総合研究機構(愛理 IRI)と共に、世界一の 愛理 IRI-「潜在能力科学研究所」を創設し、大型「いやしのビル」を建設し、「ホリスティック(全人的)医学・不思議の科学」を含むこの分野の世界一の拠点に育てたい。企画、構想、連携や 2025 年中に 100 名の人財を公募中で、良い研究者や多方面の人材の推薦等で皆様のご協力を得たい。このために現本部および総武線「稲毛」駅近辺に数カ所のスペースを既に借増し、小型ビルの建築確認済証も発行され、超大型ビルを含む大型ビル 3 棟の企画設計もまとまった。こころが綺麗で有能な各種人財の結集を望んでおり、自薦・他薦を期待している。また、大学等や国立系研究機関等との連携を模索しつつある。

ISLIS の設立趣意は、物質中心の科学技術から、こころや精神を含んだ 21 世紀の科学技術へのパラダイム・シフト(枠組革新)を通じ、真理の追究と共に、人間の「潜在能力」の開花により、健康、福祉、教育と社会および個人の幸福や心の豊かさを大きく増進させ、自然と調和した平和な世界創りに寄与する事である。

ISLIS は 1995 年の創立来 30 年、現在の科学知識の延長で説明が出来そうも無い不思議なこころや精神を含んだスピリチュアル・ヒーリング、気功、潜在能力、超心理現象などの存在の科学的実証とその原理の解明を追求して来た。この間に生命情報科学シンポジウムを、海外での開催や 17 回の合宿形式を含め 60 回主催し、英文と和訳付の国際学会誌 *Journal of International Society of Life Information Science* (J.Intl.Soc.Life Info.Sci. or *Journal of ISLIS*) を年 2 号刊行し、総計 7,000 頁以上の学術論文と発表を掲載してきた。

この間に、不思議現象の存在の科学的実証には多くの成果を挙げた。しかし、その原理の解明は世界的にもほとんど進んでいない。今後共、これに大いに挑戦したい。

本学会は現在、世界の 11 カ所に情報センターを、15 カ国以上に会員を、擁している。

キーワード: ホリスティック医学, 国際生命情報科学会, ISLIS, イスリス, 生命情報科学, 潜在能力科学, 国際総合研究機構, 愛理 IRI, アイリ, 科学平和文化財団, SPC-F, 科学, 精神, 脳, 心身, 代替医療, CAM, 統合医療, IM, 予防医学, 未病, 精神神経免疫, スピリチュアル, ヒーリング, 気功, ヨーガ, 瞑想, 潜在能力, 催眠, 心, 不思議, パラダイムシフト, 世界像, 世界観, 超常現象, 超心理, 超能力, 平和, 幸福

mikio-yamamoto@iri-g.org Fax 043-255-9143 090-9232-9542 〒263-0043 千葉県稲毛区小仲台2-13-31 Peace

<大会長講演>

優しささえも言われぬダイナミズム

帯津 良一 医学博士, 医師

第 60 回生命情報科学シンポジウム 大会長 国際生命情報科学会 (ISLIS) 前会長
日本ホリスティック医学協会 名誉会長, 帯津三敬病院 名誉院長 (日本, 埼玉)



要旨:天候の異常,人道支援からの撤退,世界各地における紛争の拡がりなど,地球の自然治癒力の凋落はますますその度を増している.その結果,不幸な生活を強いられる人の数は増加の一途をたどり,このままでは地球の滅亡も決して絵空事ではなくなった.

一方,この世に在りながら,生と死の統合を果たす人々が少しずつ増えてきている.生と死の統合とは,この世に在るうちから,あの世をしっかりと視野のうちに納め,あの世に対する期待と展望をもって生きることである.つまり,この世だけを見ていたのでは決してホリスティック医学にはならないのである.

そして,生と死の統合をはかる人が増えてくるにつれて,気が付いたのである.統合を果たした人は,いずれも,ある種の優しさと,えも言われぬダイナミズムを備えていることに,この人たちにしてみれば,これは人生の大きな成果である.とともに,優しさとダイナミズムを備えた人で,地球上が満ちあふれてくると,地球の自然治癒力が高まることは必至である.

そこで地球の自然治癒力の回復というホリスティック医学の大テーマはもう一つの大テーマによって叶えられることが分かったのである.

キーワード: 地球の自然治癒力,生と死の統合,優しさ,えも言われぬダイナミズム

連絡先: 帯津 良一 医療法人直心会 帯津三敬病院 名誉理事長 〒350-0021 埼玉県川越市大字大中居 545 番 Tel: 049-235-1981

<会長講演>

香りの生体への影響を探る

河野 貴美子

国際生命情報科学会 (ISLIS) 会長

国際総合研究機構 (IRI) (日本、千葉)



要旨:河野はこれまで,様々な香りがもたらす生理学的な変化を,主として脳波を指標として報告してきた.

この ISLIS シンポジウムにおいても 2011 年に「各種香りの生体への影響の差異 -脳波による検討-」と題して,スポーツ実施前のリラックス誘導効果や催眠瞑想時の瞑想導入効果などを脳波の,特に α 波を指標として解析し,心拍や呼吸数の変化とともに総合的に報告した.今回,大変貴重な香りとされる龍涎香(マッコウクジラの腸にできた結石が排出され海を漂って海岸に漂着したもの)聴香時の各種生理変化を一般的なエッセンシャルオイルと比較検討した.前回同様,心拍,呼吸,脳波など生理指標の変化を報告し,さらに今までに検討した各種香りにおける実験と合わせ,香りの生体への影響を多角的に検討する.

キーワード: 地香り刺激,龍涎香,リラクゼーション,呼吸,心拍

著者連絡先: 263-0051 千葉県稲毛区園生町 1108-2 ユウキビル 40A 電話 043-255-5481 電子メール: kawano@a-iri.org

<常務理事講演>

ピラミッドパワーの科学研究 (2007 年 10 月~2025 年 8 月) (Scientific Research on Pyramid Power: Studies from October 2007 to August 2025)

高木 治, 河野 貴美子, 山本 幹男

国際総合研究機構(IRI), 科学平和文化財団(SPC-F) (日本、千葉)

要旨:我々は 2007 年 10 月以来,ピラミッド型構造物(pyramidal structure: PS)の未知なるパワー (ピラミッドパワー) を実証するため,厳密に科学的な実験を続けている.実験ではバイオセンサ(キュウリ切片)を,PS 頂点と頂点から 8m 離れた較正基準点(コントロール)に 30 分間置き,その後バイオセンサを密閉容器に移し,48 時間程度保管した後,容器内に放出された揮発成分(ガス濃度)を測定した.我々が行ったピラミッドパワーの実験は,主に次に示す 2 種類の実験である.Ⅰ)「ピラミッドパワー実験(PP 実験)」: PP 実験は,PS 自体が潜在的に持っている,いわゆるピラミッドパワーを検出する実験である.Ⅱ)「瞑想実験」: 瞑想実験は被験者が PS 内に入り瞑想(ヘミシング)を行う実験であり,また瞑想中と比較するため,瞑想前と瞑想後の時間帯でも,PS 頂点にバイオセンサを置いて実験を行った. PP 実験によって実証した内容は,主に次の 5 点である. 1) PS のピラミッドパワーの存在を明らかにした (1%有意で実証: 夏期データ). 2) PS のピラミッドパワーが,PS 頂点に 2 段に重ねて置いたバイオセンサに対して,下段と上段で異なることを明らかにした (ピラミッド効果の大きさを示すサイ指数 Ψ が,下段のバイオセンサに対するサイ指数 Ψ は -3.01 でマイナスの値,上段に対するサイ指数 Ψ は 5.52 でプラスの値となり,下段と上段で有意差を得た. $p=4.0 \times 10^{-7}$). 3) PS の潜在力の詳細な解析の結果,バイオセンサ間の絡み合い (Bio-Entanglement) と考えられる現象を明らかにした. 4) PS のピラミッドパワーは季節変化をしないこと,また Bio-Entanglement の効果は季節変化をすることを明らかにした. 5) PS のピラミッドパワーが,バイオセンサの特性であるガス濃度の概日リズムの位相に影響を与えることを明らかにした. 瞑想実験によって実証した内容は,主に次の 4 点である. 1) PS 内で被験者が瞑想中と,瞑想後と比較した結果,生体センサに与えるピラミッド効果が異なった ($p=3.13 \times 10^{-10}$). 2) PS 内で被験者が瞑想した影響は 20 日間程度残り,瞑想後 20 日以降,ピラミッド効果が検出できなくなった. 3) PS の有無,瞑想の有無の組合せは 4 通りあり,それぞれ実験を行った.その結果,ピラミッド効果の発生要件が明らかになり,PS 内で被験者が瞑想した時にのみ,ピラミッド効果が有意に検出された. 4) 瞑想前実験は,被験者が実験室から 6km 以上離れた自宅に居る時にを行った.瞑想前日の実験と,瞑想の数時間前の実験と比較した結果,瞑想前日のピラミッド効果は誤差の範囲でゼロ

となったが、瞑想数時間前のピラミッド効果は有意な値となった。本発表では、これまでの実験結果の全体を説明するとともに、今後の実験予定等も発表する予定である。ピラミッドパワーに関する研究は、未だアカデミズムの世界では異端と見做されることが多い中、我々の実験結果は、この分野において世界初の研究成果である。今後この成果が一般に広く認められ、科学における新たな研究分野となり、幅広い応用の可能性が期待される。

キーワード：ピラミッド、潜在力、瞑想、ヘミシンク、バイオセンサ、キュウリ、ガス、サイ指数、Bio-Entanglement

代表著者連絡先：〒263-0051 千葉県稲毛区園生町 1108-2 ユウキビル 4FA 電話 043-255-5482 電子メール：takagi@a-iri.org

参考文献

Takagi, O., Sakamoto, M., Yoichi, H., Kawano, K. and Yamamoto, M. (2020) Scientific Elucidation of Pyramid Power: I. Journal of International Society of Life Information Science, 38, 130-145. https://doi.org/10.18936/islis.38.2_130

<研究発表>

ピラミッド型構造物内の瞑想によって影響された 潜在的なピラミッドパワーと Bio-Entanglement

(Potential Pyramid Power and Bio-Entanglement Influenced by Meditation in a Pyramidal Structure)

高木 治, 河野 貴美子, 山本 幹男

国際総合研究機構(IRI), 科学平和文化財団(SPC-F) (日本、千葉)

要旨：我々はピラミッド型構造物 (pyramidal structure: PS) の未知なるパワー (ピラミッドパワー) の研究を、2007 年 10 月から続けている。その結果、バイオセンサ (食用キュウリ切片) を使用した厳密に科学的な実験によって、ピラミッドパワーを実証した。そしてこれまでに、バイオセンサに対する次の 2 種類のピラミッド効果を実証した。(i) PS の潜在力によるピラミッド効果。(ii) PS 内部での被験者の瞑想によって影響されたピラミッド効果。(i) の解析結果から、バイオセンサ間に、あたかも“絡み合い・もつれ”の様な現象があることが示唆され、我々はこの現象を”Bio-Entanglement”と名付けた。Bio-Entanglement により、それまでピラミッド効果の大きさを示す指標と考えていたサイ指数 (Ψ) が、実は PS の潜在力によるピラミッド効果と Bio-Entanglement の効果とが混じりあったものであることが分かった。そのため、我々はサイ指数 (Ψ) の表式を、PS の潜在力によるピラミッド効果 (サイプライム: Ψ') と、Bio-Entanglement の効果 (サイダブルプライム: Ψ'') とに、表式を分離した。その結果、PS 頂点に 2 段に重ねて置いたバイオセンサで、下段のサイ指数 (Ψ_{layer1}) より上段のサイ指数 (Ψ_{layer2}) の方が、年間を通じて大きくなる要因が、PS の潜在力によるピラミッド効果 (Ψ') によるものであり、またサイ指数 (Ψ) が季節変化をする要因は、Bio-Entanglement の効果 (Ψ'') によるものであると結論した。これまでの研究報告は、 Ψ' と Ψ'' の解析結果は、(i)に関連した、PS 内部の瞑想の影響を除外した実験データを使用して行った。これに対して今回の発表では、我々は(ii)に関連した、PS 内で被験者が瞑想している状態、および瞑想後の実験データを使用して、 Ψ' 及び Ψ'' を解析した。その結果、瞑想中及び瞑想後の Ψ' の時間変化は、化学反応の逐次過程 (2 段階反応) を示す近似曲線によって、他の関数に比べて最も良く近似できることが判明した。このことから、ピラミッドがエネルギーを変換する機能を持っているという仮説を説明するために提案したモデル、つまり PS が瞑想エネルギーを吸収、変換、変換されたエネルギーがバイオセンサに影響を与えるというモデルの正当性を確認することができた。また Ψ' の下段 (Ψ'_{Layer1}) と上段 (Ψ'_{Layer2}) を比較したところ、瞑想中から瞑想後にかけて、 Ψ'_{Layer1} はマイナスの値から徐々にゼロに収束し、 Ψ'_{Layer2} はプラスの値から徐々にゼロに収束するという、ほぼ対称的な変化をすることが判明した。

キーワード：ピラミッド、バイオセンサ、キュウリ、2 段階反応、Bio-Entanglement

代表著者連絡先：〒263-0051 千葉県稲毛区園生町 1108-2 ユウキビル 4FA 電話 043-255-5482 電子メール：takagi@a-iri.org

参考文献

[1] Takagi, O., Sakamoto, M., Kawano, K. and Yamamoto, M. (2021) Potential Power of the Pyramidal Structure IV: Discovery of Entanglement Due to Pyramid Effects. Natural Science, 13, 258-272.

<https://doi.org/10.4236/ns.2021.137022>

[2] Takagi, O., Sakamoto, M., Kawano, K. and Yamamoto, M. (2021) Potential Power of the Pyramidal Structure V: Seasonal Changes in the Periodicity of Diurnal Variation of Biosensors Caused by Entanglement Due to Pyramid Effects. Natural Science, 13, 523-536.

<https://doi.org/10.4236/ns.2021.1312046>

<研究発表> 「こころ」の起源について考えるシリーズ 日蓮、ホワイトヘッド、ユング、シェルドレイク...

岡田 真一 博士 (理学)、臨床心理士

科学平和文化財団 国際総合研究機構 (愛理, IRI) (日本、千葉)

要旨：13c の日蓮遺文 (「御義口伝」の冒頭部分) の記述 1) と 20c 初頭の A.N.Whitehead 中期哲学中の概念 (「自然認識の諸原理」2)) は、現在改めて振り返ると、時空中に“自立能動で群れを成し出現した安定的な素粒子、原子、分子、結晶、高分子、錯体、生命、恒星、小宇宙… (自己組織化体)”は、同一性帰帰志向により物質としての静的・動的形態安定性を確保しつつ、多様性展開志向によって得た新たな“経験・機縁”を、何らかの方法で共有し安定化させ、無意識化・習慣化・自動化・定着化・法則化…させる微妙な 2 志向性の相互作用 (これがそもそもの“こころ”の起源か…) を描いた点で、類似していた。

一方、20c 初頭、C.G.Jung は、「共時性」概念の提唱で独自に心身二元論を乗り越え、「心と身体は別々の実体ではなく、全



く同一のいのち」3)との解釈に到達している。ただ、その一方で、民族、人類…に共通の元型を含む集合無意識がいかに形成されたのかについてはいささか歯切れが悪い。すなわち、果たして個体がそれぞれ経験した事象がどのように共有されていったのか、その機構が当時（現在も）不明であったことが大きいのだろう。

この困難について R.Sheldrake は、その存在形態に時間項（振動）が含まれるものは、その振動の膨大な繰り返しという過去が現在に流れ込み、その存在形態を安定化させるとの仮説を唱えた（だから時空中に大量にある水素原子の姿は、数式表現できるほど安定ととらえる）4)。しかも、他の動的パターン（新規な分子・結晶形態発生から動物の記憶・思考・行動パターンまで）も繰り返されることで、レベルは異なるものの、より容易に起こるようになり安定化するとする。そのうえで、縁起的（たまたま）に生起した事象も、類似パターンが繰り返され、または繰り返すことでより習慣化・定着化・法則化すると説く。

もしこの仮説が何らかのかたちで確認されれば、つまりは、日蓮、Whitehead が描写した自己組織化体に働く志向性の一つ（同一性回帰）は、もう一つの志向性（多様性展開）の膨大な繰り返しによる定着化・法則化したイベントとの結論に至る。Jung が突破できなかった集合無意識の形成過程も、このことで理解可能となるだろう。そしてこの姿こそ“こころ”という事象が、多様性展開志向に鋭敏な意識部分と半ば定着しつつある個人的無意識および広大深遠な集合無意識領域…で構成された各階層が、同時に激しく流転していくゆえンであるのかも知れない。

1)植木雅俊、日蓮の思想-「御義口伝」を読む、筑摩選書 281、筑摩書房、2024。

2)森元斎、ホワイトヘッド哲学における生成と主体、年報人間科学、No.31、1-14、2010。

3)桑原晴子、心と身体に関連性に関する分析心理学的研究の展望、岡山大学大学院教育学研究科研究集録、No.162、47-57、2016。

4)Rupert Sheldrake, Setting science free from materialism, EXPLORE, Vol.9, No.4, 211-218, 2013。

キーワード：日蓮、ホワイトヘッド、ユング、シェルドレイク、元型の形成、汎心論

連絡先：Tel:090-6521-7951 E-mail：makuharihamada@gmail.com

<研究発表>

擬態を考えるシリーズ 「擬態」進化と風土

岡田 真一 博士（理学）、臨床心理士

科学平和文化財団 国際総合研究機構（愛理IRI）（日本、千葉）



要旨：現況での最大の超常現象は、生命現象そのこと自体であろう。なかでも、生物の驚異的な擬態は、古来より人々の興味と関心を惹きつけてきた。演者もその一人である。本発表では、まず数種の昆虫等の擬態例を見ていく。そして、これらの驚異的な「擬態」は、従来から唱えられているような「突然変異（たまたま）」と「自然淘汰（生き残ったもの勝ち）」で果たして説明し尽くせる事象なのか？また、そもそも擬態に関し「いかに？」を問い続けることにより「なぜ？」まで行きつけるのか、参加者の皆様とともに考えてみたい。

この「擬態」の謎を突き詰めていくと、根源的な謎にたどり着かざるを得ない。それは、生物の各個体に仮に「経験、夢、こころ」が備わっているとして、それらは各個体の死によってすべて消えさってしまう物事なのかどうかである。もし、そうであれば、擬態進化は個体の経験、夢、こころとは無関係ということになる。その一方で、個体の経験の一部は、たとえばスイッチング遺伝子のオン/オフパターンで次世代に伝わる事が確認されているが、その果てに大規模な擬態形成がなされることを想像するのはむずかしい。

他方、心理臨床の分野で「風土臨床」という概念が唱えられている1)。すなわち、生態系と周辺環境すべてを含めた風土自体がいわば「こころを持ち、夢を観て」おり、そこに生きる個体は、風土のそれらを共有・分有するという考え方である。そして沖縄のカミンチュウ（神職）の観る夢が風土にかかわる出来事と対応している例を挙げ、「身体像」が「土地」に拡大・投影され、現象として心身の「心」と風土の「風」のシンクロをもたらすと象徴的に記されている。

上記のような心身と風土の相互作用は、人間と風土に限らず、あらゆる生物個体と風土の相互作用の存在を予想させる。すなわち、生物の擬態進化についても、まず風土と各々の生物個体との心的相互作用が存在し、そのうえで身体の連関的な変化が起きている可能性を想像させるものである。

1) 青木真理編著：風土臨床：沖縄の関わりから見えてきたものー心理臨床の新しい地平をめざしてー、星雲社、2006。

キーワード：擬態、進化、風土、経験、夢、こころ

連絡先：Tel:090-6521-7951 E-mail：makuharihamada@gmail.com

<一般講演>

Holistic Sync ～ テクノクラシーへの対処方

荒井 紀人

科学平和文化財団 国際総合研究機構（愛理IRI）（日本、千葉）



（仮）**要旨：**世界経済フォーラムは「グローバルリスク報告書」を発表し、2025年度は国家間の武力紛争や地政学上の対立、誤報と偽情報、異常気象や社会の二極化のリスクが高いと評価した。これらリスクの短期・長期的解決策として、IT & AI の活用は大前提になっているが、同時にテクノロジー自体が及ぼすリスクも決して無視できない。今後、ナノ・バイオ・神経・デジタル技術が融合し、物のインターネット（IoT）から身体インターネット（IoB）へと進むことは既定路線であり、トランスヒューマニズムが

進化のベクトルを指し示すだろう。人間よりも AI による価値判断や意思決定が重んじられることが、我々にとってどんなインパクトを持つのかは未知数だ。

グローバル富裕層が推進する、デモクラシーに代わるテクノクラシーのアジェンダの社会的な実装によって、失業や不平等、貧富の二極化、人権・自由の侵害、検閲と監視、健康被害や環境悪化などのリスクが高まることが、世界中の市民から懸念されている。官民複合体のテクノクラートが、マクロ～ミクロに自然環境、社会、個人、身体、物質までをトータルに制御・支配するために、通信技術や社会工学においてグローバルなシンクロを用いることは、その方法の核心部である。そこで、グローバル・シンクロを多角的に分析し、特にその、時間論的な特性と限界を明らかにすると共に、テクノクラシー/トランス・ヒューマニズムを超える突破口となるコンセプトとして、「ホリスティックなシンクロ」を新たに提示しつつ、より平和的なネクスト文明開花のためのホリスティックな対処方を探る..

キーワード：物のインターネット (IoT) , 身体インターネット (IoB) , テクノクラシー, トランスヒューマニズム, グローバルなシンクロ, ホリスティックなシンクロ

荒井 紀人： 科学平和文化財団 国際総合研究機構(愛理 IRI)

<一般講演>

光と反射 ―構造と超越のあわいに生きる ～CTMU と哲学的スピリチュアリティの交差点で

谷口 隆一郎 博士 (哲学)

聖学院大学総合研究所 教授 (日本, 埼玉)



要旨：わたしたちは、「この世界は、どのようにできているのか?」「意味は、どこからやって来るのか?」そんな問いを、科学の最前線でも、あるいは日々の静かな実践のなかでも、一度は抱えたことがあるのではないのでしょうか。今日ここにいらっしゃるのは、科学・生物・物理・医療・身体・波動など、多様な分野で探究を続けておられる、自由でしなやかな知性の方々です。この発表は、いわゆる「哲学」の枠を越えて、「意味はどこから来るのか?」「応答するとはどういうことか?」という根源的な問いを、構造と思索のあわいで見つめ直す試みです。

本発表では、ちょっと変わった角度から「世界の成り立ち」と「私たちの在り方」について私が考察していることを紹介させていただきたいと思います。きっかけとなったのは、CTMU (Cognitive-Theoretic Model of the Universe 自己記述的宇宙モデル) という、一風変わった宇宙論です。これは、宇宙そのものが“自分のことを自分で語っている構文”だという驚くべき発想に基づいています。CTMUは、宇宙を「自己構成・自己処理言語(Self-Configuring Self-Programing Language)」として捉え、未来によって現在が選ばれるという逆行的な意味構造 (Telic Principle, 終局目的原理) を提唱します。

そんな CTMU の思考は、日本の哲学者・西田幾多郎が語った「場所としての存在」や「絶対無」、ジャン＝リュック・マリオンの「飽和現象＝意味が溢れて把握できない現前」、井筒俊彦が見つめた「内的な光としての神的現れ」と、不思議な共鳴を見せてくれます。そしてベルナルド・カストラップの“すべては意識である”という現代的唯心論とも多層的に交差します。

こうした多様な思索の交差点に立ち上がるのが、「光と反射」という詩的メタファーです。「光」は意味の方向づけ、あるいは構造を超越した神的實在、「反射」は応答の構文的展開を象徴し、祈り・他者性・沈黙・倫理といったスピリチュアリティの次元と接続されます。本発表は、構文の限界において開かれる跳躍と、それに応答する存在の身振りに着目し、意味の生成と倫理的応答性が交差する地点における新たな存在論の可能性を提示するものです。意味はいつも、どこから差し込む光のようにやってきて、私たちはそれに反応し、応答し、跳躍する——その構図を通して、祈りや倫理、他者への開かれが新しい輪郭で見えてくるのではないか。そんな問いかけを、本発表でみなさんと一緒に深めていければと思っています。

キーワード：CTMU (自己記述的宇宙モデル), Telic Principle (終局目的原理), SCSPL (自己構成・自己処理言語), 構文と意味生成、跳躍と応答性、光と反射 (詩的メタファー)、西田幾多郎 (場所的論理・絶対無)、ジャン＝リュック・マリオン (飽和現象)、井筒俊彦 (内的現前)、ベルナルド・カストラップ (分析的唯心論)、スピリチュアリティと構造、他者性・祈り・沈黙・倫理

<一般講演>

日常における「非日常空間」の創出 ～ファミリー・コンステレーションの土着化の試み～

谷口 起代 博士 (社会デザイン学)

合同会社共創ラボ代表、立教大学社会デザイン研究所研究員 (日本, 千葉)



要旨：ファミリー・コンステレーションは、欧州で発展したシステミック家族療法の一つで、代理人を用いて家族関係の力動 (ダイナミクス) を探る手法です。私はこの手法に出会って 25 年、精神障害者支援や大学教育の現場を通じて、心理療法とソーシャルワークの統合的実践を重ね、地域社会に根づかせる取り組みを進めてきました。

この手法の実践では、代理人が実際には知らない家族の情報を身体感覚として「感じ取る」など、科学的には未解明の現象がしばしば現れます。こうした現象はオカルト的と見なされることもありますが、当事者の認知変容や関係性の気づ

きを促し、深い癒しや再統合をもたらすことがあります。

私はこの営みを専門家だけの閉じられた治療ではなく、月1回の塾(他者と共に生きられる身体づくりを目的とした場)として、一般に開かれた「非日常空間」として、地域に展開してきました。本発表では、その実践過程と得られた洞察を紹介し、こうした場が現行の保健医療福祉制度が推進している地域共生社会に向けた取り組みの不足を、補完しうる可能性について提起します。

キーワード: システミック・ファミリー・コンステレーション、日常における「非日常空間」の創出、心理療法とソーシャルワークの統合、地域共生社会

<ミニシンポジウム 「起源」を考えるシリーズ>

「こころ」の起源について考える ―それぞれの視点から―

ファシリテーター 岡田真一 博士(理学)、臨床心理士

科学平和文化財団 国際総合研究機構 (愛理, IRI) (日本, 千葉)

要旨: 「こころ」はどこから来たのでしょうか。人や動物にのみ存在するのでしょうか。死とともに失われるのでしょうか。または生死を超えて続くのでしょうか。物質や物質の動きとは別次元の「ものごと」なのでしょうか。あるいは「からだ」の物理・化学的な運動・反応に伴う付随物・副産物に過ぎないのでしょうか。現実社会を観ると、21世紀も四半世紀が過ぎようとする今ですら、戦火はむしろ拡大し、物質主義・新自由主義の嵐が各国で吹き荒れ、殺伐としたムードが人々の気持ちを席卷しているようです。だからこそ「こころ」の行く末を観じるためにも、一度原点に立ち還る必要があるのではと考え、企画いたしました。

本ミニシンポジウムでは、各々のパネリストにそれぞれの視点から、とてもではないが語り尽くせることではないと承知しつつ、敢えて手短にその見解を語っていただく予定です。パネリスト講演後の総合討論では、ご参加の皆様の熱いご意見・ご討議をお待ち申し上げております。

キーワード: こころの起源、からだとこころ、意識と無意識、ものごと、魂と魄

連絡先: Tel:090-6521-7951 E-mail: makuharihamada@gmail.com

日常の中の「超常」を語る―

ファシリテーター 岡田真一 博士(理学)、臨床心理士

科学平和文化財団 国際総合研究機構 (愛理, IRI) (日本, 千葉)

要旨: 科学はそもそも「再現性」と「妥当性」が常に問われるものです。しかし、そのことにこだわり過ぎると、日常の中で、実はどう考えても超常的と思わざるを得ないような貴重な経験・エピソードが、報告もされず放置され、個人の記憶の忘却に任せて失われてしまうことが相当存在するのではないのでしょうか。加えて、現状の物質主義的な教育のせい、個人的な一過性の経験やエピソードなど、科学になり得ないし、取るに足りないこと…などと決めつけてしまうことが多いのではと危惧しております。一方、科学の中でも、天文学は再現性を問うことが困難な学問ですし、臨床心理学の歴史は、個別の特異な事例と思われていたものでも、類似事例の集積により背後にある普遍的な構造が次第に明らかになるというこの連続でした。つまり、ある人が「どうでもいいこと」などと思っている経験・エピソードの中に、他の方も「私にもそういう経験があって…」などと、実はどうでもいいどころか、未だに知られていない事象の現れである可能性が大いにあるわけです。そのような認識が少しでも広がることを願って本ミニシンポジウムを企画いたしました。

本ミニシンポジウムでは、各々のパネリストに「実は私は…」的な経験・エピソードを語っていただきます。パネリスト講演後の総合討論では、ご参加の皆様の「実は私にも…」的な経験・エピソードに関する語りも一同でワクワクしながらお待ち申し上げる次第です。

キーワード: 日常のなかの超常、個人的経験、個人的エピソード、「実は私にも…」

連絡先: Tel:090-6521-7951 E-mail: makuharihamada@gmail.com

<ミニシンポジウム>

「地球幸福憲章」

ファシリテーター 山本 幹男 博士(医学)・博士(工学)

「地球幸福憲章」起草者代表 (日本, 千葉)

要旨: 「地球幸福憲章」は、場当たりの政策でなく、無宗教の人も宗教を信じる人も含めて、皆の数千年間の指針となるべき、地球上が丸ごと皆が平和で幸福になるべき憲章を目指して、2012年に山本幹男が草案を提起し、2年掛で数十人が参加しての50回程の議論を経て起草された。その後、ちばてつや 漫画家(2025年に文化勲章受章)や故日野原重明 医師等 高名な方々に「提唱者」や「賛同者」となって頂き、2014年9月9日に神田の日本学士会館にて創立総会を開催し、記者会見し発表した。その後、人材や資金不足等で、この普及推進活動が出来ていなかった。

しかし、戦争が多発している今こそ、本憲章が必要で 平和への関心が高まっているので、これを再開しなければなら
ないので、是非とも多くの方々に、この運動にご参加頂きたい。

キーワード：地球幸福憲章, 幸福文明, 精神文明, 生き甲斐, 平和, 戦争, 幸福, 自由, 平等, 博愛, 民主, 環境

連絡法：mikio-yamamoto@iri-g.org Fax 043-255-9143 090-9232-9542

コメンテーター： 募集中

鈴木 洋美

荒井 紀人 科学平和文化財団 国際総合研究機構 (愛理 IRI)

全世界の、ヒューマニスト、ロマンチスト、アイディアリスト (理想主義者)、
エコロジスト、リベラリスト、パシフィスト (平和主義者)
全員集合 「地球幸福憲章 net」 へ

2014 年 9 月 9 日発表版

起草者代表 山本 幹男 博士(医学)・博士(工学)

地球幸福憲章

The Earth Happiness Charter (TEHC) テーク

— 人類はきょうだい、生物は家族、地球・宇宙は家 —

-Humanity as Brothers and Sisters, All Living Creatures as One Family, the Earth
and Universe as Home-

今日までの目覚ましい科学技術の進歩と資本主義経済システムにより、今まさに物質文明が開花している。それは、
人々の生活を快適にする一方で、核兵器に象徴されるように人類絶滅の危機さえもたらした。更に、地球規模の自然
破壊や貧富格差を引き起こし、資源や覇権をめぐる紛争も絶えない。

本憲章は、繁栄の陰に生じた弊害や危機を乗り越え、人類と生物や地球・宇宙の永続的で輝かしい未来を創るため
に、物質文明と精神文明を統合し、「人類は兄弟、生物は家族、地球・宇宙は家」との根本理念に基づく「地球幸福文
明」への転換をここに提唱する。

目指す「地球幸福文明」は、今日までの文明の貴重な概念である、自由・民主・平等・博愛・連帯・参画・福祉・健
康・平和・自然保護・共生を成熟させ現実化する。また、個性が生かされ、生き甲斐と愛・喜びに満ち、生き生きと生
きられる、皆が社会・生物・自然と共に 幸福に生きる事を主眼とした文明である。

人種、民族、宗教、国家の垣根を超え、世界の人々による連帯と多様な価値観への理解に基づく、あらゆる外交、経
済、文化的努力により平和を実現する。核兵器・生物化学兵器などの速やかな全面禁止、通常兵器の段階的削減、そし
て廃棄を目指す。

経済システムは、弱肉強食・収奪と浪費型から、民主的で公正なシステムに転換する。福祉・健康・文化・環境・共
生・平和・精神性を重視した経済活動を促進する。

この文明の実現のためには、一人一人が、全ては全体と相互に繋がり合う、掛け替えのない存在である事に気付き、
先人の叡智に学び、潜在能力を開き、他への思いやりの心を深めると共に、分かち合う行為が必要である。

本憲章に賛同する世界の人々による「地球幸福憲章ネットワーク」とその「世界本部」をここに創設し、これを皆の
力で発展させることにより、本憲章と「地球幸福文明」の実現をめざす。このために、世界の多くの人々・団体と叡智
の本「地球幸福憲章ネットワーク」への結集を求める。

<一般講演>

食と農から始まる「やさしい平和」のカタチ

— 創造還元・自然還元・絆の還元という新しい仕組みの提案 —

伊藤 淳

科学平和文化財団 国際総合研究機構(愛理 IRI) (日本 千葉)



要旨：私たちは今、自然との距離が広がり、人とのつながりが希薄になり、地域の豊かさが見えにく
くなっている時代を生きています。こうした中で、「本当の平和とは何だろうか？」と考えたとき、それ
は単に争いがない状態ではなく、人と人、人と自然が丁寧につながり合いながら、安心して暮らせる日々の積み重ねな
のではないかと -そんな視点から今回の提案を考えました。 本発表では、私の実体験の食と農を起点に、地域や自然との関
係性をもう一度耕しなおすための新しい報酬の仕組みとして、「創造還元」「自然還元」「絆の還元」の3つを提案しま
す。

- ・創造還元 クリエイティブリターンは、自然栽培の体験、地元の食材を使った料理ワークショップ、新しいメニューづくりなど、地域の発酵食品や食文化を守り育てる活動や空き家のリノベ、アーティスト活動などを応援する仕組みです。
- ・自然還元 ナチュラルリターンは、無農薬栽培や環境に配慮した暮らし方、食品ロスを減らす工夫、歩いて通勤、ごみ拾いなど、自然と調和した行動に光を当てます。
- ・絆の還元 ボンドリターンは、地域のお祭りや農家さんとの交流、お家のかたづけ、お困り事のボランティアなど、人と人のつながりを深める行動を支えます。

これらの活動に対しては、地域通貨やポイント、環境クレジットなどで「ありがとう」の気持ちを形にし、地域の経済や信頼を育む流れをつくっていきます。また、AI やブロックチェーンなどの技術も活用し、活動の見える化や公平性を保つ工夫も提案したいと思います。この取り組みは、誰もが自分なりの「豊かさ」を感じられる社会を目指すものであり、争いではなく共感や対話によって成り立つ、優しくて力強い“平和の土壌”を耕していくための一歩です。

キーワード：豊かな仕事、食と農の再創造、つながりを耕す、自然に寄り添う暮らし、地域とともに、未来への種まき、ありがとうの循環、土と生きる、みんなで育てるまち、平和を育てる日々、自然、生活の質、QOL、楽しい仕事、おいしい食、家族、自然栽培、オーガニックライフ、平和、自給自足、健康、地域再生、土、AI、コミュニティ、資源、人間力、調和、環境問題、ゴミ屋敷、不用品、アレルギー、音楽、アーティスト

伊藤 淳：junitojunito77@gmail.com

<一般講演>

理学療法士としての18年

芳賀 ゆかり

科学平和文化財団 国際総合研究機構(愛理IRI) (日本、千葉)



要旨：リハビリテーションという言葉は医療現場だけでなく、日常生活の中でも広く認知されるようになりました。リハビリテーションと聞くと、一般的には障害により低下した身体機能の回復ということに焦点があたると思います。しかし本来、リハビリテーションという言葉は身体機能の回復だけに対して使われるのではなく「人間らしく生きる権利の回復」や「自分らしくいきること」につながるすべての活動に対してリハビリテーションという言葉が使われます。今回のシンポジウムでは、私が理学療法士として急性期病院、回復期病院、在宅医療と一連の医療現場を経験した中で感じた医療制度の光と闇、理学療法士が担う役割の重要性、リハビリテーションの可能性を中心にお伝えできればと思っています。

キーワード：リハビリテーション、医療制度、機能回復、在宅復帰、社会復帰、QOL

芳賀ゆかり：yukari-haga@iri-g.org

<講演>

(仮題) ワンネスの時代-科学・医学・文化・社会におけるつながりと統合の意識

叶 礼美

非営利型一般社団法人 国際生命意識協会 代表理事

カリフォルニア州政府認可スクール・オブ・スピリチュアリズム ワンネスインスティテュート 代表

(仮) 要旨：「ワンネス-生きとし生けるものはつながり、ひとつの生命であり、互いに影響を及ぼしあって存在している」という概念は、医学、科学、文化、社会など多方面で受け入れられつつあります。医学の分野では、瞑想や共感が「つながりと愛情のホルモン」として知られるオキシトシンの分泌を促し、人類の調和やワンネスの実現に貢献することが示された英論文(高橋徳・叶)が掲載されました。これは、社会のさまざまな領域で問題となっている分離や分断をつなぎ直す概念として、ワンネスの思想が科学的にも検証されはじめた証といえるのではないのでしょうか。また、霊性やエネルギーといった概念も言及されており、それらが健康や社会の在り方に望ましい影響を与える可能性を示唆しています。量子力学においても、「量子もつれ」や「ホログラフィック宇宙論」が、宇宙のすべてがつながっていることの理論的な裏付けを提供しています。さらに、古代から続く文化や宗教においても、ワンネスの思想が見られます。仏教の「縁起」、神道の「八百万の神」、スーフィズムの「神との合一」などは、個々の存在が全体とつながっていることを示唆しています。また、古代文明や原始宗教においても、自然を大いなる理(ことわり)として崇敬し、生命のつながりを大切にする思想が根付いていました。前回の講演では「現代の処方箋-スピリチュアリティとワンネス思想」をテーマとしましたが、今回は「ワンネス」の原理と、生命を第一とする価値観が人々の意識変容を促し、選択や行動が変化することで、医学、科学、文化、経済、政治、社会に変化をもたらす可能性について探ります。こうした意識的な取り組み

みが、地球文明の本来的な生命の回復と調和的な成長・進化へとつながるのではないのでしょうか。本講演では、「ワンネスが示す未来の可能性」について、多角的に考察していきます。

連絡法：国際生命意識協会 office@lifeconsciousness.org

<講演/実演>

奄美のシマ唄や八月踊りの伝承からみえてくるもの

結

フリーランス／国際生命情報科学会（日本、千葉）

要旨：奄美のシマ唄や八月踊りの伝承に関わるようになって約18年。非常に稀有で、世界的に観ても貴重な存在である師匠の元で習い、またその活動のお手伝いをするために近くにいたことで、そうでない、リスナーであるとか、通常の弟子の立場では得られないかけがえのない経験をさせていただいた。今回はそうした中で導いた自分流芸能論のようなものを実演も交えさせていただき、できればミニシンポジウムの様に皆様とも議論や意見交換が少しできたらと考えている。

テーマは「芸能の起源とロゴスとエートス」。あくまで自分流の推論の域を出ないが、しかしながらそもそも学術的にか科学的に証明することは絶対にできない領域（スケール）の話となる。地球上で生物が音を感じ、それによって敵を識別するようになる頃からイメージする。その後生命は言葉を操るようになり、それは必然的に「芸能」へとつながっていくこととなる。さらに、言葉の進化と芸能の深化は平行して進むが、言語的な変化が身体的な芸能の変化のスピードを指数関数的に凌駕するようになっていき、急速に身体が衰退し現代のIT時代へとつながっていく。

そして AI を中心とするさらなる IT の進化の先には、テクノクラシーと呼ばれるような統治と情報テクノロジーが完全に一体化した未来が待ち構えている。（ISLIS 夏合宿内で他の方が講演予定）今後の人類の未来を考えるうえで、想像によるオルタナティブ人類史とでも言えるようなこのような俯瞰を、検証はできないことが前提ではあるが、多くの人と共有し、その内容を研鑽していくことは重要なのではないかと考えている。

キーワード：奄美シマ唄、八月踊り、古層の芸能、ロゴス、エートス、芸能の起源、身体と精神、フィクション、物語まつり、社会、村、グローバル化、IT

連絡先：yoshifumi-furuhashi@iri-g.org



<ワークショップ>

シンギングボウルの共鳴現象：人と場のワンネスを考える

佐藤 克巳

佐藤整体院長（日本、千葉）

要旨：ワンネスとは、全てが繋がり一つであるという概念である。これは単なる比喻ではなく、現代物理学においても、あらゆる存在がミクロなレベルで相互に影響し合っていることが示唆されている。本ワークショップで焦点を当てるシンギングボウルもまた、その振動を通して私たちを取り巻く「場」と共鳴し、深い相互作用を生み出す。

全ての存在は、分子、原子といった微細な要素から構成されており、これらは絶えず振動している。私たちの身体も例外ではなく、内臓、骨格、筋肉、そして細胞の一つひとつに至るまで、固有の振動パターンを持っている。これらの振動は、私たちが意識せずとも、周囲の環境や他の存在から発せられる振動と常に相互作用しているのだ。

特に興味深いのは、これらの関係性が単に個々の要素の足し算ではなく、**「場」**の影響を受けることでより複雑かつダイナミックなものになる点である。例えば、特定の空間にシンギングボウルを配置するだけで、その場のエネルギーが変化し、そこにいる人々の身体にも微細ながら明確な影響を与えることが観察される。これは、物理的な距離や接触がなくとも、振動が媒介となって情報が伝達され、共鳴現象が起こっていると考えられる。

私たちの身体は、この「場」と常に相互作用しており、その影響は、経絡の状態、関節の柔軟性、内臓の緊張度、筋肉のトーンといった多岐にわたる指標で確認できる。例えば、シンギングボウルの音色や配置を変えることで、肩の力が抜けやすくなったり、呼吸が深まったりといった変化が起こることがある。これは、目に見えない波動が、私たちの身体の生理的な機能に直接的に作用している証拠と言えるだろう。

本ワークショップでは、この**「見えない波動と体の関係性」**を参加者自身が体験し、深く探求することを目指す。実際にシンギングボウルの音と振動を感じ、その配置を変えることで身体にどのような変化が起こるのかを、ご自身の感覚を通して観察していただく。この実践的なアプローチにより、私たちは日常的に意識することの少ない「ワンネス」



の概念を、より具体的な身体感覚として捉え、自己と世界の繋がりについて新たな洞察を得られることだろう。

キーワード: ワンネス, 共鳴現象, シンギングボウル, エネルギー, 波動

連絡先: 佐藤 克巳 e7878n@gmail.com

<ワークショップ>

意識の比率と身体の使い方の関係性を知る

小原 大典

時間芸術学校クリカ 校長 (日本, 東京)



要旨: 昭和 30 年代まで伊豆八幡野に隠棲していた哲人・肥田春充の「聖中心力」、バック・ミンスター・フラーの「Do more with less」、そしてチベットに伝わる「虹の身体」にインスピレーションを得て開発した心身共鳴統合システム「レインボー・i@」(Rainbow integrity) は、トレーニングを通じて筋肉を鍛えたり持久力をつけたりするのは全く違ったアプローチで心身の統合度を高め、生命力を活性化します。

具体的には、身体を動かす時の意識の比率を、習慣的な状態とは異なる比率に変えることで、今ある体力のまま構造が強くなり、筋力を無駄に使わなくなるのです。結果として、全ての動きが軽やかかつ楽になるということを、いくつかの遊びを通じて体感して頂こうと思っています。年齢性別に関係なく、ご自身の身体に眠っている力の素晴らしさを知ることになるでしょう。

キーワード: 比率、意識、心身、共鳴、統合

連絡先: 241@kulika.com

<ワークショップ>

電磁波の話と測定

青木 威明

デンキノアオキ 代表 (日本, 千葉)

一級電気工事施工管理技士 第一種電気工事士 電磁波測定士



要旨: 1964 年の東京オリンピックの時から比べて、現在の電気使用量は 10 倍 になり、又、ケーブルの使用量は一軒あたり、おおよそ 150 メートルだったのに対し、現在はおおよそ 1000 メートル。コンセントや照明の数も、15 か所程度が 45 か所程度に増えた。現代では切っても切り離せなくなった大変便利な電気について少し考えたい。

日本の電気設備の設置方法は、「内線規定」により規制されている。電気工作物の設計、施工、維持、管理等の技術的な事項が包括された民間自主規格。(2005 年改訂→住宅のコンセントや照明の数を増やす様推奨され電化を後押し)

(更に 2022 年水廻りのアースが【勧告】→【義務】へ、全てのコンセントのアース接続が【推奨】→【勧告】へ)

日本では一般家庭用電源として、100V の電圧が使われています。世界各国は 200V が主流。オームの法則により、電流が 200V の設備より二倍流れている。したがって磁界の発生も約二倍にもなっている。その様な状況なのに、一般家邸のリビングや寝室についているコンセントは、ほとんどアース端子が付いていないタイプです。そのため、家電にアース線が備わっていても、つなぐ場所がありません。つまり、家電製品側と建築側にコンセントギャップが生じているという現状です。パソコンやゲームの取扱説明書には必ずアース線を繋いでくださいと、書いてあります。これは、漏電火災や感電以外にも「電磁波」を逃がす通り道を作る意味があります。

日本の家は小さい割に電化製品が多い。電気配線で囲まれた鳥かごの様な状態。私達の様な都会生活者は【アーシング】が重要なのではないかな? アースを接続している居住空間の利点を説明します。

また、アースが接続されていない住居のアーシング方法や、アース工事についても解説します。

国内外主要団体の電磁波に対するスタンスを確認しつつ、参加者がそれぞれに、電気との関わり方を見つける きっかけになればと考えています。

キーワード: 極低周波 電磁界 イオン 静電気 アーシング 25V/m 2.5μT

連絡先: 青木 威明 denkinoaoki@gmail.com

<体験報告>

農と食の imagination

伊藤 照夫

株式会社 アイ・テー・オー 代表取締役 (日本, 千葉)

要旨: 農と食をめぐる悪化の状況は、変わらない。有機農業と慣行農業の農業栽培 2 形態のことについて語られて久しいが、有機農業は我が国でそして世界で長い歴史を有して行われてきた潜在的な農業形態であるものの、慣行農業に主体を奪われてしまい、遅々として進化しない。かつての日本は、美しい農村風景が全国に広がり、地方の活力が感じ取れ、文化も培ってきた。その光景は今や見られない。それは、どこに行ってしまったのか？その原因を想像 (imagination) してみる。主なコンテンツは、以下の通り。

1. 自然栽培から慣行栽培へ

- ① 農薬と化学肥料は、戦争から -戦後の食料増産の担い手-
- ② 食糧増産は国土を変えた -湖沼の干拓、森林の開墾-
- ③ 進む環境汚染・破壊 -地圏・水圏の汚染の蔓延-

2. 自然栽培と慣行栽培の違い

- ① 作物への農薬・化学肥料の影響 -作物の生物的特性を変える-
- ② 食べ物としての機能の違い -外的圧力への抵抗力の違い-
- ③ 食品の安全性の懸念 -免疫力の問題-

3. 農業生産力の推移

- ① 農地面積の減少 -国土の荒廃、防災力の低下-
- ② 農業従事者の減少 -地方の活力・文化の喪失-
- ③ 自給率の減少 -食の安全保障の脆弱化-

キーワード: 慣行栽培, 自然栽培, 農地面積, 農業従事者, 自給率



<学会 FES Vol.1 「癒しの響き 至福の時」>

「ペヨーテソング〜ネイティブ・ アメリカン・チャーチの祈りの唄」 唄と演奏・ライブ・トーク

荒井 紀人, 伊藤 淳

科学平和文化財団 (SPC-F) (日本, 千葉)

要旨: ペヨーテ (*Lophophora williamsii*) は、アメリカ南西部とメキシコ北部の乾燥地帯が原産の、小さく成長が遅いサボテンです。その向精神作用は、主にメスカリンという天然の幻覚性アルカロイドを高濃度で含有していることによります。ペヨーテは主に先住民コミュニティにおいて、何千年もの間、神聖な薬として使用されており、19世紀後半からは特にネイティブ・アメリカン・チャーチ (NAC) によって、霊的、精神的、感情的、肉体的な癒しのための神聖な秘蹟であり、強力なメディシンと見なされています。

NAC のペヨーテ・セレモニーの主な目的は、精神的なつながり、深い洞察と内省、多元的な癒し、共同体の結束、伝統と文化の継承等です。

ペヨーテ音楽の特徴は、まず、極めて高い各パート (唄とラトルとウォーター・ドラム) の律動の高度なシンクロにあります。その共振する響きは、独特の時間を生み出し、聴く人を日常の時間とは違う変性意識状態に誘います。マントラのペヨーテソングのリフレイン、ひょうたんラトルの複雑で豊かな倍音、さらに、ドラムの中に水を入れて、水を振動させて音を出力するウォーター・ドラムの倍音の響きには、多元的な癒しをもたらす効果があります。特に、ペヨーテ・セレモニーにおいては、共に唄い、音を奏でることによって、即興的なユニゾンを生み出し、全体の一体感と調和感が高まります。

全米で推定 35 万人いると言われている NAC の存在も、そのセレモニーで用いられるペヨーテ音楽も、今まで、日本で紹介されたことはほとんどありませんでした。1987 年に NAC (サウスダコタ) のメンバーになった荒井紀人は、以来、ペ



ヨーテソングを唄って祈り続けており、今回は、荒井紀人（ペヨーテ・ソング&瓢箪ラトル）と伊藤淳（ウォーター・ドラム）の二人でペヨーテ音楽の紹介と演奏を行います。

キーワード: ネイティブ・アメリカン・チャーチ/ペヨーテ・ソング/ウォーター・ドラム/ひょうたんラトル

アルケミー・クリスタルボウルによる倍音浴

牧野 持侑

マスター・サウンドアルケミスト

株式会社 くりすたり庵代表 (日本, 静岡)



要旨: アメリカ在住時の 1985 年、初めてクリスタルボウルに出会い、その響きに魅せられ、数個のクリスタルボウルの購入をきっかけに、「音による癒し」の道を歩み始めました。

1996 年に帰国以来、伊豆に拠点を構え、クリスタルボウルをメインとしたサウンド・ヒーリングコンサート、ワークショップをはじめ、講師としてクリスタルボウルの講座、奏者の育成を長年行ってきました。

今年ちょうど出会ってから 40 年の節目ですが、現在では日本はもとより、世界的にクリスタルボウルの認知度が高まり、クリスタルボウル奏者やヒーラーが国籍や性別、年齢に関わらず多数活動されるようになっていきます。

2002 年に、従来の白色の「フロスティッド・クリスタルボウル」とは製法、音色・響きの異なる「アルケミー・クリスタルボウル」という新種の製品が初めて紹介され、以来 23 年、このアルケミー・クリスタルボウルを数十個を使用したコンサートやサウンドヒーリング活動を行っています。その特徴は、従来のフロスティッドボウルでは不可能であった「倍音」が豊かであることです。この倍音が音の癒しにおいては不可欠の重要な響き、要素であり、今回のライブにおいて、その倍音豊かな響きを皆さんに体験していただきたいと思います。

* 「倍音浴」は造語であり、くりすたり庵で商標登録されています。

連絡先: makjun1@gmail.com くりすたり庵 <https://crystalian.com>

奄美に残っていた古層の芸能「八月踊り」ワークショップと実演

結

楽器編成等 (基本的に PA なし。アコースティックです)

手持ち太鼓 奄美三味線 ギターの中から適宜選択



要旨: 奄美の八月踊りは 奄美大島や加計呂麻島を中心とした奄美群島の中のいくつかの島の各集落で伝承されてきた民俗芸能です。旧暦の八月十五日の満月の月明かりの下で夜を徹して、もしかしたらもっと昔は何日にも渡って踊られました。男女が輪になって会話のように唄をかけあいながら、手持ちの太鼓の他は、はやし声かけ声や、指笛などの身体を使った楽器だけで踊られます。今回のフェスでは実際の唄掛けはできませんが、かけ声等で声も出しながら皆さんと一緒に輪になりたいと思っています。私が受け継いでいる八月踊りやシマ唄は、奄美群島の中の「加計呂麻」島の「花富」集落のものです。60 年以上前に島を出て多くは関東で暮らしてきた師匠から受け継いだそれは ちょうど「タイムマシン」のように、現代的になる前の「花富」の踊りが残されたものです。日本でも辺境中の辺境とも言えたその頃の集落には、はるか昔の生活の残照がまだ残りました。もちろん完全にはなく琉球王朝や薩摩を経由して西側発祥の現代的な文化は入ってはいましたが 他の多くの地域のようにそれに塗りつぶされることなく古い「唄」や「身体」が残されていたことが、師匠の唄や踊りからはうかがえるのです。

その師匠から伝えられた古い花富集落の八月踊りが、今の世界を読み解き、次世代を作っていくうえでとても重要なことであるという考えに至るまでには長い年月が必要でした。何の説明もなければそれは、現代も各地で行われている盆踊りや、今の八月踊りのちょっと原始的なバージョンでしかないと感じられます。そうした話は今回のシンポジウムの中の別の時間に少しお話ししますが、このフェスの時間枠では、皆さんにその片鱗を体験していただけたらと思います。

キーワード: 奄美, 八月踊り, シマ唄, 加計呂麻, 花富, 朝崎郁恵, 旧暦, 満月, 民俗芸能, 始原的, エートス, 反復 祭, あそび, 風土臨床, 神ごと, 輪踊り, 唄かけ, 歌垣, 古層の芸能

連絡先: yoshifumi-furuhashi@iri-g.org